



## 巻頭言

## 年頭にあたって

所長 増子 昇  
Noboru MASUKO

1989年の新春を迎えて皆様にご挨拶申し上げます。

生産技術研究所は工学系の総合研究所であり、大学の特色である研究者の自由な発想に基づく創造的研究を基盤として、科学技術の進展に着実な貢献をしております。今年は創立40周年にあたります。昭和24年5月に、教育を主とする第二工学部から研究機関としての生研に転進して以来、関係者の血のにじむような努力で培ってきた生研の伝統と文化が、技術と情報の時代における日本の学術の発展にとって掛けがえのない重要な存在で有ることを自覚するとともに、国際交流を通じてそれを世界に分ち合うことをわれわれの使命と考えております。今年もまた所内の教官・職員・学生各位の一層の努力と活躍を期待致しますとともに、所外の皆様の生研に対する一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

昨年もまた「六本木に立地すること」を巡ってさまざまな動きがありました。幸いと申し上げて良いのかはわかりませんが、現在のところ何らかの選択を迫られる事態には至っておりません。しかし生研の将来進むべき道に関しては、おそらく40年の歴史を持つわれわれのコミュニティを崩さないということでの合意の上に、いかに積極的に冷静かつ重厚な対応をするかという課題が遺されています。国土庁の多極分散の考え方も、よく考えてみれば、かねがねわれわれが六本木移転以来、都心と千葉の二極運営の形で実行してきたところであり、両者の間に模範的な情報ラインを建設するというようなことを含めて、実験研究の場としての千葉実験所の充実を計ることが当面の課題となります。一方都心においては、ソフト的な研究の発展を軸にわが国の科学技術の創造の中核となるべく努力を重ねていくことが課題となりましょう。

現在われわれの置かれている状況は、実用的な成果を能率良く生み出し、有効な知識を効率良く運用するというビジネス社会の論理が、十年先や二十年先の人類の可能性のために創造を行う場である大学附置の研究所にも持ち込まれるようになったということに起因していると思われまふ。創造を基底価値とする場を守るのであるということを外に向かって主張するためには、厳しい自己規律に裏付けられた説得力のあるアカデミック・プランを実行していく必要が有ります。すなわち都心ではソフト、千葉ではハードという二極運営を基礎とする都市型研究所の理念に沿った自覚と行動とが必要となります。ただそのことのために特別な事をするというよりは、個々の研究室が個性と実力をもつてのびのびと活躍している日常性を維持することに加えて、従来からのいきがかりに囚われすぎて独善に陥らないように注意することが大切と言えまふ。

今年もまた大いに頑張りまふ。